

がりと深い浸透度を改めて認識したとしても不思議ではありません。そして、これこそ西洋文化の基底にある道徳思想と一致していることを確認し、彼らの日本研究の基本的な部分で共通の成果としていたのではないのでしょうか。

その後、このシリーズが完成するとその英語版を底本、あるいは参考にして他言語の版が作られ、さらに多くの言語圏の人たち<sup>(2)</sup>がちりめん本の発展に携わりました。この英語版シリーズの巻数は「号」で示され、翻訳にあたった外国人とその作品は以下の通りになります。

### ■外国人翻訳者とその作品

第1号の『桃太郎』はデビッド・タムソン (David Thompson, 1835-1915) が翻訳をしています。彼はアメリカ長老派教会の宣教師で文久三 (1863) 年に来日し、この物語の翻訳までに20余年にわたる在日経験がありました。大学南校 (東京大学の前身) の教員を務め、岩倉使節団の通訳として欧米に同行し、日本で人生を終えた人物です。また、彼は第2号の『舌切り雀』、第3号の『猿蟹合戦』、第4号『花咲爺』、第5号『勝々山』、さらには第6号『ねずみのよめいり』を担当しました。



『桃太郎』



『花咲爺』

第7号はジェームズ・ヘボン (James C. Hepburn, 1815-1911) による『瘤取』<sup>こぶとり</sup>です。彼もアメリカの長老派教会宣教師で、アメリカ人宣教師として最も早い安政六 (1859) 年に来日しました。和英辞典の編纂やヘボン式ローマ字を考案し、明治学院の礎を作った人物です。彼がこの事業に関わり始めた頃は、日本での滞在が25年を越えており、わが国の文化に精通して

いたと考えられます。

第8号の『浦島』と第9号の『八頭ノ大蛇』<sup>やまたのおろち</sup>、また第13号の『海月』、さらに第15号の『俵藤太』<sup>たわらのとう</sup>は、バジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) が翻訳しています。彼は明治六 (1873) 年に来日したイギリスの言語学者で、海軍兵学校や東京帝国大学の教員を務め、日本語研究はもとよりアイヌ語の研究者として有名になった人物です。

ジェームズ夫人 (Mrs. T. H. James, 生没年不明) は、第10号の『松山鏡』、第11号の『因幡の白兔』<sup>いんぱん</sup>、第12号『野干の手柄』<sup>やかん</sup>、第14号『玉ノ井』、第16号『鉢かづき』、第16号 (番号重複) 『分福茶釜』、第17号『竹篋太郎』<sup>しっぽい</sup>、第18号『羅生門』、第19号『大江山』、第20号『養老の滝』を翻訳し、このシリーズの20号21冊の有終の美を飾りました。また、彼女はこのシリーズの続編 “Japanese Fairy Tale Series Enlarged English Edition” (続「日本昔噺」シリーズ) で第21号として『三つの顔』、さらに第22号『思い出草と忘れ草』を翻訳しています。また、Japanese Fairy Tale Series Large Size Edition (「日本昔噺」大判シリーズ) では『鉢かづき』を担当しました。(このシリーズは先にタムソンが翻訳していた『桃太郎』と併せて2冊からなっています。) さらにジェームズ夫人は “Japanese Fairy Tale Series 2nd Series” (「日本昔噺」第2シリーズ) で、『不思議の小植』を作りました。彼女についてはこれほどの貢献した人物でありながら、イギリス海軍軍人トーマスの夫人で名前がケート (Kate) であること以外は分かりません。

前述のジェームズ夫人が『三つの顔』や『思い出草と忘れ草』を担当した “Japanese Fairy Tale Series Enlarged English Edition” には、ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn-小泉八雲, 1850-1904) が登場します。彼は明治二十三 (1890) 年に来日したジャーナリストで、松江の旧制中学校をはじめとして熊本の第五高等学校東京帝大で英語教員を務めると共に多くの日本研究の著作を記して多大な業績を挙げた人物です。ここでは、第23号『猫を描いた少